

震災後に見られた服装の経時的変化  
大阪女子学園短大 ○井町晴江 増田依子  
神戸大 岩崎錦 光沢滋美 夙川学院短大(非) 吉野鈴子

<目的> 服装は、人間のおかれた自然環境や社会環境に応じて変化するものであり、その状況における人間の心理を表出するとも言われる。

ここでは阪神大震災という物心両面で極端に厳しい状態におかれた人間が、どのような服装をしたか、また日時を経て環境が徐々に回復するにともなって、服装がどのように変化していったかを記録・分析し今後の資にしたいと考えた。

<方法> 震災後、神戸三宮駅前の交差点で週2回の写真撮影による定時・定点観測を行った。この写真から対象を一般に服装の変化が激しいといわれてきた女性にしばって、衣服の種類・色、靴および靴の種類、帽子およびマスクの着用の有無を調べ、その頻度を求めた。また、比較のために大阪でも同日に調査を行った。

<結果> 報道に見る震災直後の服装は、老若男女を問わずジャンパーやダウンジャケットなど活動しやすい表着にズボンというのがほとんどであり、これにマスクをつけ、リュックサックを背負ったスタイルが震災ルックと呼ばれた。しかし、環境が少しずつ回復し、徐々に暖かくなるにつれて服装も変化した。すなわち、表着では身体の保護や汚れに対応して着用されていたものからブレザーやカーディガンなど軽快でファッションブルなものが着用されるようになった。下衣はズボンからスカートへの変化が明白に表れた。これらの変化は、厳しい環境におかれて緊迫していた心に周囲が落ちつきを取り戻すにつれ、装おうというゆとりが生じ、活動への意欲を高めようとする意識が表れたものであると考えられる。